

5212

7

松島圖誌

卷之四



5723
7







なむ大澤おきといふ処に末らせり小沢聖徳太子村
なまひ一本持嶋といふを以て説く持嶋の字を用
たし
鳥羽帝の時時より五六百年もあつたが
也されども信ずるにたし又堂内記に見佛上人住嶋
まて日十位華を讀誦をり上茂鎌倉の二位乃禪尼が
なひて天竺の傳舍利二粒をり松十本に傳文をてへて
贈りてまふを松まといふてまふを松食の時なり
は松島の名ありて古方まも此れはま亦信すにま次
松嶋といふも總名はて其内小敷多の勝地靈跡ありま
八百八島ありまをいふも大小の時と敷多をいふま

今大津をかまふに松嶋村は屬して名は嶋三十五
あり五大島の島二つ長其れ時代其餘他村に屬し
て松嶋乃謂面小はなり脚堂に入ら島を敷十ま
にまをりまを海面まあをりて春嶋に石をもちま
まふまふといふも年々奇狀を聖蹟中ま古より
名高派を雄島なり名なき小嶋は我もまふまふ
其ま信をも天邊の自然にまはまふりまふまふり
納むまふまふの形我をまふとすめ松をめぐり
に隨て千餘萬畝かまふと雖もかには里人といふ
かまふははく千餘畝をまふまふありまふまふ其ま

岸を歩いて八百八拾のふもろのなるべし
此半元子の名を八八の字のわたりありしが
昔も此の人は八八の字のわたりありしが
はげしき日相すも風勢なる時浪声耳に喧し
たを式松嶋千浦表に数十の割罫をすべし
浪を千浦面平にして杖のみを碧碌置置して
見よ一し中二数十の碇をありて置く
宮守権を擬して宮房に列すよかめく
○此島松をさく名付けて殊に松樹多し其の松根を
巖石にまを投翰す浦風を撻りてをく
屈曲溼葉す

さか臥すめく倒さふ如く其浦面に倍し
龍蛇の水に入ると幾ふ千由ま筆法及ぶ
十○凡何國乃海辺も地まつとたつ
となりく浦邊野は式式大小の嶋ともな
かてて多く手仙く上度をして崩をん
如く或が樹根をあけり或は奇石を出
むか如此なり○此一村した嶋者寺の
と殺生伐禁をゆえ危嶋の類も人
又大奥研に述べた術を説く
入てそ音をさく時も殊更熱許は杖を助く○此地

風景の美なる事春夏秋冬をさうして又晝夜を
なして代々遊人の名を成なり中には又平なほを
夢比朝なで足なをり里人と目次驚くとも思ひ付も
多をりちと叫び入ると昔は又同より(又境及に辨
せり)○毎年七月十六日乃夜大地饑鬼をい上
百八の燈籠を流し遠近群聚して是を足り其光湯を
滴り天鼓響く秋多の鳴り煙火の流りに随て或は
わらばを成をかききさぬたさふに記詞なり

○長光坂 仙臺城下より松嶋に入る道に三丁餘の坂を
は上りてのりて松嶋の法面を足り音響も亦臨濟

関山は心上人松嶋へ下りてふ時衣を脱ぎて衣をぬき
衣長光坂と名付くといふ此坂の如何の時に傳はれり

按ずるに今耽淡の字を用ひて所流上我願をそひ
ゆえに之をくといふ好事の文士附會小じんふく取夫
坂長く緩ゆるく身走さかには長光よみくといふ附會乃

観あり

○西柳もくろ松 長光坂の傍に山上はわり隈俗の説ふ
為行り 為時院の北面乃寺なり密に宮寺と通せり
寺せ成りなきをばあふれと云は西柳其相を解を飲
僧とちり諸國を巡りて爰に到るの傍松下は牛に草

かつて難ありて中牛飽さざるをまことなりと罵りしをわ
る好ふと我れ少く入籍し向うに伊勢の(河)河津(津)へ行は
むと納め度と云ふをばあはれとすきとゆふを以て若ふ
西行社に(成)成安さり臨まざり依て西行もこれ松平ゆふ
若年即ち松崎の時神左とて

一説に若好松崎はまことの入口にて童子の年をひく
さあつて和歌をよめりたり月にてみ桂男はまは来て
すいなくもむを准子あそびんをを子さして雨とやう
な氣もかりなまもぬりてはしむととこたふ子めらん
と云ふこと西行大は社に側なる松を手作りもると

一して藤原御命の松はかきく松の太木あり中を童子
は松嶋の鏡守山王持現乃化身也と云ふ事あり

○山王社 松竹持の社也

海和天皇乃時時應覺大

師江島坂本此山王を以然に勧請すは本初を五大堂
天皇巻の側にあはれ我寛永十九年の真雲居和尚
を乃実に移せりと云毎年四月中中より日中の間に
○観音堂 本像の般若志心傳都の作毎年十月十八日
崇成あり

○天麟院 孫岩さの南横町といふ死乃裏は方尺あり

○先太子身山公の侍姫は徳川氏絶後少時忠輝
將軍の夫人となりまひし忠輝朝臣なわたりて翠輝刃
に觸れしを以て後夫人を仙臺に移り落解し西館
より山宮に往らむ先後此城に移りて六十八歳にして終り
俗名を女に奉て此寺に立侍と云ふ

○聞通院 瑞白寺の西南生靈傳といふ所に在り
先太子身山公の侍姫子越前守光宗公十九歳にして早
世し之を女に奉て此寺に立侍と云ふ

仁明帝承和五年乙未、あつて此寺を建すと云ふは、
新山地福寺と稱して天台宗なり其後最明寺入道
時頼、此寺に來り法心上人なり、つて天台を改め
て禪宗とて法心を開祖と云ふ松嶋山園福寺と稱ま
す也、是より大覚覺慧智覺覺滿明極をいひて唐僧來り
て住持に九十一世義山和尚に玉りて鎌倉建長寺の法
なり九十二世実覚宗中和尚より妙心寺派と云ふを慶
長十年、良山公再び造營して、同十四年落成
永く伊達家の宗廟なり、寛永十五年、義山先君
乃建命に、是より雲居和尚を請持し、中興開山と云ふ

て瑞岩園福寺と社記云々

一説は時教入道僧の密となりて行脚して松嶋に
まゝり給ひて頂五天堂を舞臺あせり能興行ありし
夜時頼も多く乃人にて説きく又ありてひてそめ
の投者たつとなきこよ時教おもひて声高く笑ひと
しを僧徒怒りて時教を打擲などてこよバヤリと
いひこむく其が夜逃を去り箕相窟にかくれ一宿
名なひ鎌倉に伝ひて臥天台僧を追放し法心上人
を岡山とて臨津宗を改め松嶋山園福寺と名づ
くとゆふ○按をるに又一説に松嶋寺天台の岡宗を

淳和天皇の時時天長五年坂本山王を松島
に移し慈覺大時我別當とて三十坊十方石の法
窟ありて時を音竜山園福寺と云 龜山天台王
の時時又永年中坐りて松嶋山園福寺といふと
は()を未審○法心上人俗名真壁平四郎僧を成
実の時に入唐し徑山寺の無準とて僧に授て法
を授け帰國して七返法をてひり奉り授けり
元亨釋書東國高僧傳等には見えたり傳あり述入
徑山令風月歸阿闍羅大進場法心透得蓋一物
尤是其辭手四郎又親後撰には又法上人の和号と

蓮姓法師松崎へまゝやく、法門を託して、返りけり
は、いゝなり、そに夜の闇に、蓮が身なりと、賦てん
本を、天竺の秘人、雲居和尚をもて、攝津の鹿尾
山に住せり。先太守の招によりて、松尾に來りて、或
人の傳へし、池邊を居和尚瑞岩寺にありて、夜ごと
二雄鳩の座禪堂へ、通ひて、觀念を修し、夜よけり、瑞
岩寺か、あけ人和尚、誠人とて、最暗き夜をえりて、
蓮の傳へし、松尾にはのほりて、和尚は、返りて、木の
上より手をせし、その首を攫らるに、和尚立とせり
て、女し、も、勤う、返りて、時居とも、その、悔、こゝろ、ありし

うばと、此人も、返りて、手拭をなせし、此和尚を、昔年の
く、寺に、返りぬ、生、返りて、和尚と、お、計り、は、い、く、に
お、づ、ね、さ、す、夜、ふ、り、と、淋、く、返、る、を、ほ、り、く、違、ひ、を、み
夏、年、月、久、し、く、た、れ、と、あ、や、す、も、さ、り、も、な、つ、ん、な、文、を
と、に、更、さ、な、り、と、か、答、へ、け、り、と、あ、さ、も、の、已、か、な、せ、り、と、こ、の
二、心、よ、あ、る、と、き、に、さ、き、と、り、な、く、さ、返、り、く、と、問、ひ、す、と、せ、り
ふ、和、尚、答、へ、り、ふ、す、と、或、夜、さ、さ、く、乃、事、あり、て、又、
く、立、て、な、ほ、り、居、り、と、お、時、返、り、を、と、も、の、さ、し、り、と、か、こ
ち、さ、て、覺、へ、る、は、必、ず、若、人、な、ま、は、け、り、と、づ、り、又、な、ま、

傳殿 聖德太子御遺物拾遺 聖德太子御遺物拾遺 聖德太子御遺物拾遺
 先太子良山公の尊像 聖德太子御遺物拾遺 聖德太子御遺物拾遺
 の正敷音天竺より傳來して往古松尾寺開基の時
 より奉尊と稱し例は毘沙門木像慈覺大師作すた
 に二十人の位牌を安置せしむ 良山公殉死の寺に
 五十七人の位牌あり 義山公殉死の寺に其の間上
 段中段孔雀乃同文工の間葛の間杖乃同墨繪なる
 唐の器を構子合天井欄間乃彫物玄關をたゞしむ
 諸國の名匠をわづめく是れ造り大棟小棟をう繪
 も名高匠工の筆にして巧妙を極め精微致す

皆雲石の年中再興の遺物なり

○火鉢 瑞岩寺にある什物也高さ七八寸徑四五
 寸袖もわさ鈴なり形もほり鐘のふくにして中は右の

水引にてむすひとく
 手は挿すてふも低くてはくみ



先年あやまりて井の中
 おと〜〜〜〜〜

曾覺禪師の時法を修して序土徑山寺の火災を
故くもる御札とて徑山寺より贈れりといふ
毎年正月元日曉旦の時に塔頭は僧一人これを踐に
うけし兩手もてふり鳴してねむの村中を巡行せ火
災は禳ふの咒法といひりそ昔清響こゝろ數十丁
の外まゝの聞ふといふ

一 既 世俗の信に龍宮塔より唐土に傳來しそを
贈りしといふ今持氏に古も唐山より命令災あ
まはく人に難波を時よ金鐸といふ物をすりきこれ
を信よすといひりなりそ國を足に此火鈴と同一

さきとは彼方より作りし金鐸なきを

○ 新面 此れ亦端岩寺にあて春日の作といふ作は霞ハ
口の巖より糸はてつそ穴合せり松嶋寺天台はく五大
堂は舞臺あり時よりこれを彫るなりと云ふ時ハ五六百
年より久遠の物なり又箱嶋といふ所も此面の不思議
はもとて名はくといふ

右の外にも仙舍利又も鎌倉二位の尼の足仙上人
は贈りしといふ文き什物數多有りといはれり又寺
中畑の竈は遠は火の用心といふを贈りし板持あり
杖堂山三尺坊乃筆遊り近は此免住の和而此

時はふまをわけたり其字體ははぐはぐとて
 尋常なるは見ゆも衣に世の人をば伐賣美也
 ○朝解梅 瑞光寺に庭上正二株の梅あり一ハ紅花
 一ハ白花なり其如重瓣に咲く中より白の梅は花
 の固ぶとは又少しづつ一の葉あり香氣も殊にすくも
 実も三つ四つ又や五つ六つと開し華は咲きて尋常の
 梅より少し小し年々多りて十餘も結ぶ事ありさき
 光樹を得たまや年経るに従て実を結ぶ事少くま
 して 夏山公の解梅はさうらひの時種をば
 栽せりふとは和傳花鏡といふ書などにも品字梅

ハツ房の梅



秀梅をといふ観類をいふ品字梅を日本にもありて
 せむし香干実し観音なる本に 後水尾帝花香実
 といふ觀を仿ふと云て

○法身窟 無相窟ともいふ瑞岩寺中にはあり窟也
 堅固同敷尺積四寸五分五寸あり最明古入道氏窟に
 宿して法心上人と改宗の事を約せりといふ所のち
 七八十年ほど城城天龍寺覺意國師の脚して以
 臥に至り天台止觀を講むる代柱といふといふ窟の上は
 法身覺意窟は五字の觀あり

○觀堂 瑞岩寺の内より先住通玄和尚建之といふ

○千佛堂 瑞岩寺の内より本尊木仏釈迦尊像
 長貳尺六寸六分千体あり仏像長四寸五分雲居和尚建
 立れといふ

○龍月院 ○護國院 ○寶珠庵 ○圓月庵 ○大光庵

○鞠芳庵 ○法雲庵 以上瑞岩寺内の
寺に別す

○萬松庵 ○江月庵 ○香松庵 ○傳白觀 ○都隆庵

○得住庵 以上瑞岩寺外
寺に別す

○六十三ヶ巻瑞岩寺乃塔殿あり

○法雲庵の庭止に石二つあり一は長五尺幅壹尺五寸
 一は三角以形三尺幅と云ふ瑞岩寺僧覺滿禪師以庵

に住せしはわかれ時僧徒を募めし二ツの石へ水とて因て
さるる事幾なりたれば何なと開きか唐土控山寺
母大災有り我水の留を呪ふ事とを放ふらと
水を流してはた破涼に至て侍りぬ後二二年と控
て控山寺より禪師に書簡を贈り其功を讃めし禮
物とて鐘を贈ることを火鈴と名はけて今瑞岩寺
まわて

○大光巻の玄關に漢自は二字或書くも扁額あり瑞
岩寺先住唐僧明極和尚の筆なり以庵を拓時言天台
乃時よりはとて古刹寺なり昔も當村の内大光山といふ

山ありしを再興の時こそ乃此に移せりとて

○觀瀾亭 月足崎といふ所なり 太字の侍茶

屋あり 奥山公 豊辰太閤よと伏見宿殿を拜受え

らして此所に移して立給とらふ柱をを御柳の四方前

也 鐘は此寺にあり 雨寺嗜好四字の觀 光太字御山公

の御筆觀瀾亭三字は額 佐々木文山乃筆あり 外圍

乃垣に細竹を綱代は組ううす紐やうてつ打十二あけ

といふ是れ見玉垣と名づく尋常にははらり是亦伏見

伏見より移せりありて也 見玉垣は正徳時代の事か
望みはとていふはなり

持てくるは雨寺嗜好の四字を末の扁額を西園の詩

此出より西湖の懸崖摩崖山はありて天下第一と唱
松崎乃凡景も日本を冠して第一と松崎にこれあり
の秀句成りて此亭に名づけらるひて最面白

西湖初曉樓

樓

水光激激暗方好 山色空濛雨亦奇

若北西湖比西地 傑雅濃林也相宜

○陽德院 瑞岩寺の東北にあり 貞山父の夫人田村

太蔭大天清願朝臣は法眼をここに慕てはたを立すとて

○獨鈷水 陽德院の内はわで音慈覺大師獨鈷とて

土穴穿されしに清水湧出るといふ今に大旱にも涸ら

可なりと云

按て存に天輪院の境内にも獨鈷水といふありて

傳ふ所云きも同じとされども昔は其の砂汰をり

をば近頃の事とおもひ

○天童巻 瑞岩寺の東北にあり本尊十一面觀音

木仏立像長き尺実日は作陽德院殿おとし

佛といふ

○宮千代壇 天童巻の境内にあり高数尺余あり

九尺宮子代といふは童子を尊とて所せり

母とて宮千代といふ童子あり容顔よくて

才性柔和にして尋常まかざる疾風天より降臨し
よの童子なりと云ふ時の人これを見童と称せし庵ふ
久しく住居る處に暮れ天童と名づけたりせころ
見仏上人侍時にて日夜法華を讀誦しなひて
宮千代聽坐する者忽ち此日冥性て上入と曰す
讀誦せしが其声佛に正しくなるを人奇異は
之ひをちやうか上人徳化の証を童子も福なく身まの
ぬきてとて此例は勸誦なる鎌守山王の化身に
あらずんばと人といひけりとて

按ずるに封内名蹟志に宮城郡南目村宮城野

の數拾四間東畑中に空地小塔あり里人これを見
墓と號し昔松崎寺の鬼宮千代といふ者此野にて
死を里人憐れんことを埋め塚を築きて里人乃
仍りて塚の内にてあるをさく月夜家
を草草に宿りたりといふて嘆く也かゝる事
久しかりしが松崎寺の樹蔭といふ僧ありて是
ころをねふ宮城堂の茶といひけをば平良を止ら
とて又らる人乃況に宮千代末塚をよ來りしと和歌
の上乃句を得て下は句成ぬ久しくあへんといつ
らひ此二塚と云りて身ほかりぬ遺言はよりてその

を元敷を宮城野に埋むると云二説に按るとは宮を代
乃墓に宮城堂とありを傳とす一説は似たりと云
皆俗俗に傳ふと云にして執を是と定むること
○松嶋明神 今ハ松嶋あり此の古高城といふ殿の處
はあり雲明神といふ者も雲宮の内蛇が尊といふ所
よりといふ此處 負山公の功臣山岡志摩守て夫人
の踏とつて在所といふ可敷代の風は故にありてや
家所地といふに蛇が尊居住は人民も蛇敷といひり
そ流を城に移れりとも者多うりては本土の神相
なるといふ松嶋をいひて今のをよは祭はといふ今

蛇が尊は梨木明神といふあり即往古松嶋の神の右
跡たり

一説にや松嶋はあはれ神を即古の雲宮明神あり
といふを非なり

○御舟藏 太平の侍座御宮敷あり松嶋より高
城へ道路の左には水止町とて數十軒ありて是と云ふ
時も紅葉の替なり

○正徳壇 正徳壇が尊といふ云はあり天台の僧は法
といふ人の墓なりといふ高六尺間六丈ほどありこれとも

今も聖人の云ふ者なり

○護摩壇 山王山といふ天にあり高さ尺ほど四方二尺

ふさむてその側の大なる窟には十二薬師を建立しよく
護摩修行ありといふ

○法性院 竹の傳といふ処にあり○一筆堂 坊を

傳といふ所にあそ○地藏堂 一筆堂の前あり

○五葉巻 樺田といふ山の山中にあり客殿は五葉

庵三字乃親あり黄檗木巻の巻をて

○雁金山 休崎の西南にあり二つは高松峯也雁乃

飛す小に似たりと名づくといふ下のは近に出る処

を院と峙といふ其形伏人の眠に似たりと名づくといふ

一説は鳥居が此崎の轉けとなり又一説は茅野が鳥
の形なりと

○あ社とり山 松宮の西南にあり一説は朱鳥の祀也

昔仙人ありて赤松を取て一葉とりて

○海無量寺 福聚山と社を松宮の内南にあたりて

大穴といふ所の山乃半腹にあり瑞岩寺より六十余丁

あり陸路は山路に峻険あり舟より行くと比古の庭

岩より海上の眺を富山小かといふ富山を峙とをま

くをがめ此山より近く足も別に一景の勝地あり

○瑪瑙羅漢 寺中に瑪瑙にて作らるる羅漢の小像

教をあり一つ毎にさほくの筈ありてや加二基跡
なり昔岸山より柏敷くを瑞岩寺先代跡堂
和曲肥前の長崎にてはうとらふ
○羅漢樹 寺中にあり僧俗とをを仏のなる木とま
皮も烏柏のぬく葉ハ金松葉に似たり冬を怪くと
茂葉を皮や実黄赤色こころ僧形に似たり故に
羅漢樹と名づくや山にてもふきを羅漢柏といふ
本木曾山中にありいぬま沢又くさきともいふ
○達磨堂 古より上の山の頂にあり僧俗の信に達
磨大師の所はま坐禪しゆふといふ然耳坐といふ

古瓦鏡あり々々寺中以竹む達磨大師赤衣洗木
像日本三達磨と杜を片岡ハ八幡川に堂とたふ
三體ありとらう

○葉山権現 松崎の内尾にありて葉山といふ堂
にあり真山氏勧請といふ年月を志以解願院
といふ観あり

○葉山清水 葉山にあり水清冷ユリ大早にも
洞は尋常とて

○湯の原 葉山の辺に昔も温泉ありしが天台
改宗乃瓜に吾りく冷水と名せりといふ數十年前

瑞岩寺先住の和尚癩瘡を患ふに夢中に葉山
捨脱の告ありぬらうて此山の水を風呂にたてて浴
せしは速に治らうとて以てう人々未りて湯治の
法は水きうとてされとも自然の温泉をあるす
えて焚湯也

○八崎 松島の内裏には宮あり大小百余余あり
と云天台の時僧徒の坐禪などしてとれといふ又里
人の穿く窖藏とすむ多し

○七浦 竹の浦 栢二浦 鹿ヶ浦 胡桃を浦
生善浦 片の浦 光徳を浦 三浦 四浦 五浦 六浦 七浦

○八崎 象鼻崎 小松崎 龜万崎 狹崎
海師崎 蛇を崎 津ヶ崎 月見ヶ崎

右の外は天神坊を寺判官坊を寺といふあり
といれ往古天台僧徒の住する所といふ

○すかー橋 天童巻のたより五大堂へ行くに橋
二つあり一を長三間一を六間信をも幅六尺ほど有
るとはけ子のぬく間をまよいてまよくは足のぬくは
べはほどありて下敷の底さにくく流溢るる時に
漫々と碧水を流ふる衣に衣ををらるるもの目取
足震慄くまわらうるぬるもありめづるに創也

○八幡祠 五大堂鐘樓の側に小祠あり昔々當所
八幡時といふに有しを寛永十七年十一月はま
ま移されたりといふ類聚國史外奉勅宮社の部
に 評明天皇三年陸奥國宮城郡松嶋八幡奉勅
使 別表建御時疫といふ此時疫癘流行十餘にあり
て 勅使をたて祈られざるまへにされば千二百
年より以上の古社なり今は毎年七月廿一日祭式有
○五大堂 仁に近たれ小嶋ニあり堂をみて五
大尊像を安置其大同二年坂上田村磨東夷征伐を
しり下りゆふは建立まふを延慶長五年 負山公

刈田郡白石城を攻りし時夢の告ありはらうて同九年冬
修履造管等あり前はくはる朝日に乾元元年正月土
日摩羅入道勳連五郎為武運長久事所之とあり大同
二年より大政三年庚辰まふ凡一千十五年乾元九年
まを凡五百十九年

一説に田村磨の時毘沙門をかくに安置其五大堂の
慈覺大師の時にまりしこれ坂おくを毘沙門を
風赤らひぬ今も摩耶といふ所の奥赤間村南光
院といふ修験の社にありとせ

○柳嶋 今も雄岩といけり又小時ともいふ 景行朝

の法時日本武尊東夷征伐の時武時には御舟をよせ
休息いやすしむる御舟と唱ふ

一説に鳥羽院の法時見仏上人法地に住すりし
法力法力はく神物を役使せしむる事多し
ゆめて内裏より佛像器物ぶつざうぶつ多しびに御衣みえを賜
りしゆりし松崎を御寓と唱ふしりし一山の碑文
にも法説を用ひしりしことどもをよみ以故の法
歌にも松崎やをくはとことども変遷へんせんをんれ御崎
の名ハ古記事と見えたり

○波月橋 法時へそくせり橋あり長十間余あり古乃

松崎橋を先をよみて武時御忠歌の古によみて
とありしや波月橋の姿すがたありしをよみはれ橋

一説に古の委嶋橋を五大堂にありし橋也あり
とゆふされしといひきを證とせし記ある今
何色の橋とて近郊ありては春をよみ又秋をよ
みをよみしりし御舟の古歌にも歌ありし

○松崎橋 法時の橋乃ありしゆりし御舟と
名づく所ところ者必天賦あまたまなりしゆりし御舟と名づく

○松崎巻 法時兼師堂の側にありし山の碑文より
妙覺庵の舊址にして足仏上人あしぶつ親賢おんけん和尚おしょうなどの居

きし最なり

○薬師堂

○碑 松吟臺の側にあり高九尺幅八尺六寸元文元年丙辰七月瑞岩寺先住天鏡和尚の文なり天鏡の時通玄和尚試紙に伝たりを觀破はらうてその三十三回忌の時に修葺再興せしむるの事を書つたはらうと文共書あるを記すにせしむ

○見佛堂 雄崎にあり里人これを奥の院といふ是は上人法華六百部護師の道場なり

○坐禪堂 雄崎にあり圓満園跡を建祀不住

村四字の観あり

○観賢碑 此坊の内西南の方にあり世の人を嫌

罵の碑といふ碑甚高き堂文敷尺臺石乃外平大幅

三尺六寸五分より四尺三寸と傳七寸なり傳治二年丁

未の春觀鏡房觀賢といふ僧の弟子區心孤蓮を十

師授賢の徳けを傳人といふ立るなり鎌倉建長寺

の住僧一山一宰の文字書なり單體を雜るるけり

又さうなる書を文ハ甚そくといふの典種てまうらに

たう一山を座僧に鎌倉に伝持せり昔この妙覺

庵に見仏上人住しむらへ観賢も亦試紙に居る

はくは海山の靈氣を鍾りたる所にありて未だそのま
らけ傳傳として悪疾を或る世を治すのみならず
又も父母祖先を慕ひて孝子孫を成す心貴賤
賢愚となく情あるものなりぬまうりて忠信の
動くは従ひ昔を追ひ本を報さんあるはくは
の營をなけりて愚民にありてあやとすりにて
於傳教に浸淫して無益の万端をなせよとて
天下論とてくくをなせりてはくは地まうりては
るはくはく

○學生場 ニつおちるてびくく飲くまうりて名づくは

あは嶋といひ一つちたはまをいふ

○屏風嶋 屏風をくくたはまをいふ

○福浦嶋 比叺に竹多しその竹よのつはくは

らされども挿花筒に作りてあやとくくはくは

好事の人或は茶杓を作り又も尺八如意等哉

製は又一種乃竹あり尋常にあやとくく中の空を

く木のぬく刀眼釘となりて利用とぬ又竹枝を

もく箸をつくるは比叺の名おちり松の名にわくは

乃中に節えけり竹の縁に栗ゆもくことにめく
たれよめくはくは福浦嶋とも名づくはくは

○毒龍庵 福傳嶋にあり洞水和尚闍基本尊不
動木佛立像智證大師作每葉行持の仏と云信ふ
又每葉の笈と云ふおあり高三尺餘と横一尺八寸幅
上下二段に、紋うす上段に小蛇辨天共十六童子
の木像ありその仏を三寸ほどづつあり表を四面との
に減金乃銅をばうて仏像又を雲氣等を彫り九
りせさほいふにも近代のおまはらうと又云さう
○毒竜庵記碑 毒龍庵の側にあり享保十九年
甲寅瑞岩寺天嶺和尚らとを建碑文の丈さハハ
毒龍庵を洞と和尚修行乃地をさ近文以見廢

をを修造落成を終にうて 太守吉村公に請て
來臨あり唐上に画師周良をめし洞の像を
画せしめ又和哥一首をよみし風景を畫しりし
又は日に翻伏壇の竹藪の中より爰出せしをといふ
るを畫つてはうり生文觀法にこそ作時葉師堂
の碑よりもこそし種し

○磐禪石 毒竜庵の苔にあり洞より和尚坐禪し
ゆふといふ坐禪石の三字を彫りしなり

○硯石 福傳嶋にありをき尺七寸横を尺五寸洞
水和尚坐禪石といひ傳ふをきささりのまればなり

○調伏壇 福津葛にあり時觀入道松嶋寺改宗
の時天台の僧徒とて聚りて時觀を調伏せしむ
今に熊野神をこゝに祭る也

○徳津嶋 福津嶋の東にあり

○經ふ嶋 福津嶋の南にあり經塚といふ所なる
を尺五寸用八尺松嶋寺改宗の時天台の怪文といふ
文を以て焼すく、塚を築く嶋の名も是れより
といふ

一説に足上上人法華六万部をこゝに埋め
といふを非なり

○五重塔 經々葛にあり高き丈數尺五寸享保年
中萬人戒伊養とて天願和尚建之といふ

○菟嶋 昔松嶋寺天台宗の時五大堂の前に舞
臺ありて能改興行せしに菟の面法上をこゝにて
嶋まじり飛來す此に菟嶋と名づくといふ五大堂より
北島までは上凡七八丁ほどをへちちたりて面を瑞
岩寺にありて

一説葉内記に昔天台乃時能興行せし菟の面
春日の作なり事少故あつて土に埋もて夜中に
光をばちちと出島に飛來すよりて名づく也

○旭嶋 あすか 昔々武時が毎天相ありしとゆふをいそ
路あり

右嶋 みぎ 嶋とて旭嶋までを松嶋の八島とゆふ七甲
八嶋八嶋とゆふ古よりいひ傳ふる太の外にも

名あり世に伝ふる

○昆沙門嶋 いんさもん 昔田村磨昆沙門の依を削るその
五大堂の島に祭りぬひしそそ故慈覚大師五夫
明玉を作らうそ側に安置しぬひしそはあは時昆
沙門光をたぬらう武時に飛びたりぬひぬらうて嶋

の名とゆふ大黒嶋えびす宮をたゆ一嶋の島もは
昆沙門岩乃巖にうらう名づけたるそ又えり

○十貫嶋 じゅうくわん 昔金巻橋次武時に渡りて一晝夜の間
に鏡子貫文の利をたゆらう名づくとも

○大黒嶋 おほくろ ○夷嶋 ひら ○小町島 こまち ○いせ嶋 いせ ○赤
坂島 あかざか ○内表嶋 うちうら ○すゑ島 すゑ ○あふみ嶋 あふみ ○鞍掛島 あしがき

○鐘嶋 かね ○うぶと嶋 うぶと ○牡丹もち島 ぼたんもち ○小幡津島 こはたづ ○元
の宮 ののみや ○千部嶋 せんぶ ○島羽嶋 しまはね ○鴻の果嶋 つるみ ○堂嶋 どう

○繪島 え ○般若嶋 はんにゃ ○鏡島 かがみ ○雁石北平嶋 かりしがひら ○繪島 え

○行人嶋 ○羅漢嶋 ○地彦嶋 ○大猷嶋
 ○鐘ヶ崎嶋 ○折島宿子嶋 ○立巻宿子嶋 ○鍋嶋
 ○掬ヶ崎嶋 ○茶臼嶋 ○たや舟嶋 ○引通嶋 ○
 屋形嶋 ○せいぶ岬 ○唐櫃嶋 ○かき島 ○大
 江島 ○都嶋 ○筆持嶋 ○硯嶋 ○化狹嶋 ○
 みつの小嶋 ○比羅嶋 ○鯨嶋 ○引嶋 ○在城
 嶋 ○内裏嶋 ○石嶋 ○蛇嶋 ○桂嶋 ○駒嶋 ○手代嶋 ○大音嶋
 ○小吉嶋 ○沖渡嶋 ○汀渡嶋 ○依久嶋 ○鐘えこ
 ○舞子嶋 ○二王嶋 ○月星嶋 ○松ヶ崎

の名といひし大黒嶋をいひす名をといひし嶋の名も以
 昆仲白岩乃類にふらうく名づけしと見えたり
 ○十貫嶋 昔金賣橋次此嶋に渡りて一晝夜の雪
 に鉄子貫文の利を得たりと云ふ名づくと云ふ
 ○大黒嶋 ○夷嶋 ○小町嶋 ○いせ嶋 ○赤
 袋嶋 ○内裏嶋 ○すゝめ嶋 ○あふみ嶋 ○鞍掛嶋
 ○鐘嶋 ○あふと嶋 ○牡丹もち嶋 ○小稲津嶋 ○九
 の巻嶋 ○千部嶋 ○鳥羽嶋 ○鴻の巣嶋 ○壺嶋
 ○阿嶋 ○般若嶋 ○鏡嶋 ○雁ヶ嶋 ○嶋ヶ嶋

○行人鳩 ○羅漢鳩 ○地產鳩 ○大鰲鳩
 ○鐘形鳩 ○折鳥帽子鳩 ○立毛鳩 ○鶺鴒鳩
 ○鴝鳩 ○茶印鳩 ○札や舟鳩 ○引籠一鳩 ○
 屋形鳩 ○せふぶく鳩 ○座籠鳩 ○かぶさ鳩 ○
 折鳥 ○都鳩 ○筆拵鳩 ○硯鳩 ○化雜鳩 ○
 又つの小鳩 ○桂鳥 ○解鳥 ○引鳩 ○在城
 鳩 ○内裏鳩 ○右鳩 ○蛇鳩 ○
 ○桂鳥 ○駒鳥 ○千代鳥 ○大吉鳥
 ○小吉鳥 ○沖積鳩 ○汀積鳩 ○伏久鳩 ○鐘えさ
 ○舞子鳩 ○二王鳥 ○月星鳩 ○松ヶ鳩

○柳ヶ鳩 ○寒風澤 ○朴鳥 ○
 ○宮戸 ○舞鳥 ○あし鳩 ○百合鳩 ○
 白雷鳩 ○ふく鳩 ○毛々鳩 ○馬放鳩 ○
 ○小放犬鳩 ○小放鳥 ○帆たぐ鳥 ○鯉子鳩 ○遠
 學鳩 ○林木鳩 ○高鳩 ○雀鳩 ○椋鳥
 ○椋鳩 ○左へさ鳩 ○二鳥 ○東風鳩 ○西風鳩 ○
 間風鳩 ○小黑鳩 ○大黒鳩 ○犬鳩 ○鬼
 鳩 ○つる鳥 ○鏡鳩 ○折鳩 ○蒼鳩

○うけ田島 ○はねも九のまき ○金剛嶋 ○薩陀島
平家朝臣

右のまき：大抵松崎より塩釜まで舟路二里の
間左に又右を志すの敷多々とも八段道場も
あさ〜又村名なごを村ぶとにたつぬも暇もな
けまはあ〜くに書えさ〜ぬ必読もやうらん

○松嶋八景

松嶋秋月 雄嶋夕暎 梅津早春 霞浦飯厩
瑞巖曉鐘 竹浦夜雨 盤竜暮煙 江野残花
○古歌

至陸奥見松嶋又海中奇嶋往昔日本武

尊至此嶋國首國民崇之吉御嶋 上宮太子

松嶋哉御嶋者不見止日標方之月之翻之外于守者

和号本紀下 上宮太子 御者松太子のりこ

家隆朝臣

秋の歌八月せりまのあはれな歌りごと松沖入つり舟

あひそま歌い遠松の木の色をさうきほひのまを家の鶴鳥

皇太子宮大夫俊成

立入り又も来り又入松崎を〜法の宮をばにあ〜のり

来たまを〜ま〜破い〜まは八月乃氷吹十もなくなり

昔より陸奥に奇嶋多〜とい〜中〜にも松史を天

下才一名牌を色を代々の集に載る古人乃
歌數多紀ふ旅にあてはるる歌に此の歌は
詩に若くもをこゝ國風にあてはるる歌に
の賦詠多うそそ勝樂は歌に似作を更
はるそ身土はく元の代乃詩人一絶句あり
藤天錫

風光招我海山阿 拍手吟魂奈句何

御嶋烟波松嶋月 到豆招舌富樫郡

松崎やさくまつりはやままもや

相傳門
山屋坊

或云色莫翁の地に來りて風景を賞て之を詞
の及むる子をえりて終に一句を吟じて
亦りぬ海とるる家に帯りては得るる句と

朝よさを推まのりてまをうらむるあり

▲産物 ○福津嶋の竹はくしんちや ○岩長生岩長生

○石斛いしこく ○西満草にしまんそう ○城垣草じやうげんそう

○寒さうりかんさうり 唐角菜たうかくさい ○水飴みずあめ ○茶苑ちやえん ○仁連にれん

をん 秋末を製し楸く圓くし満月の形に作り

大にふりて菓子とて昔は村浪荒渡乃百姓持部

石斛



といふ者の子小太郎といひて羽州象保の人
味を妻に釣くといふと婚義との(まゝ)前
小太郎、病まゝ死しけをばせせば去にきたり
別髪して紅蓮比丘尼と杜く瑞岩寺の南は
庵をむきひは果子をふと肌を賣ふを紅蓮
せんるいと名づく今心月庵といふ寺にりとの位
居や一跡をりとも果子を今も作りて賣ふ人
ありは村の名物とい

△路程 江戸より松崎まで五の方九十九里○
仙臺城下より丑寅の間六里半○千賀の塩竈

北の方戴里半^ハ陸^ニもに里數^ハ四^ノ海^ノ宮^ヲを必
舟^ヲ路^ヲを通^スるべし^ト舟^ノ數^ハ多^クし^テ陸^ノ路^ハも亦^ハ峻^ニ
をな^し○[○]利^ノ唐^ノ驛^ハ松本城下よりより丑寅の方戴
里半

松をさう高城驛まで丑の方半里○同富山まで
寅の方戴里舟は舟のりも半里○同金花山まで寅半
里舟は舟のりも半里○同二十里舟は舟のりも半里
○同石の巻まると八里半

○富山 松崎の東北手樺村の内あり湖岸に於て
高麗山なる木立深くし^て畫^とい^へる^はの^くし^て
半腰に大仰寺と云ふ寺ありその院中より湖を以
ては松岩の湖^ハ面^上の泉^のの^く深^くる^も寫^し
目の下にちくく松乃^は松^を手に^に挿^むべし^と云^ふ
そ風景詞のれらふべ^にあり^て松^乃古^{より}松崎の
風景を富山にありと云ふ^は余^は建^邊の^眼を^ハ東^南
遠^に大^湖の^天と^一色^とを^をを^ら父^連記^右よ^ハ相
馬^の諸^山より^近き^所の^二ツ^森ま^る數^百里^の指
折^つた^たに^遠れ^る金^花山^とう^れを^日和^山の^いさ^る





まぐ皆足をあげてふむとおもむく又渡舟のり
ろふを落葉の流るゝかめと壁屋のけつろも風にな
びたて雲とちもいたれびくさはいとくうとちなり
○大仰寺 寛文年中瑞岩寺洞水和高岡基瑞岩
の末寺臨濟宗なりはちの座上人職望せにまとな
奇絶上に述ぶる

○富山観音 山の頂上にあり大同年中田村唐建
生一々ふ奥三観音の一とゆふ富山 例に田村
將軍の像あり馬にのり甲冑を帯てり佐伯の侍共
田村お軍大竹九とゆふ鬼を退治しむひは雲に片脅

をうつめく空をたぐるふとゆふ

左富山を手梅村の内はく松老の地にありは
とも山上の職を松崎を一瞬に足たろとく音なり
松老の屋敷富山のありといひろふせりいりて野
あくに附記せ

文政三年庚辰四月

仙臺

鼓笛子述
東澤 園

松崎明誌 林 千二月

文政四年己年七月

書肆

仙臺

伊勢屋半右衛門

京都

植村藤右衛門

江戸

須原茂兵衛

大阪

淺野彌兵衛



